同時代に起きた社会と文化の革命

E. ホブズボーム著『20 世紀の歴史』抜き書き

「蝶の雑記帳 111」

ぼんやり者が古代には希だった歳になってやっと、自分の同時代に起きたことをおぼろげながら捉えることができるようになった。けれでも、21 世紀になって 20 年も経つのに、今ごろエリック・ホブズボーム著『20 世紀の歴史』（ちくま学芸文庫）を読むしまつである。歴史学者ホブズボームという人が、世界とわたりあって見とどけた 20 世紀の歴史を、目配りも行き届いて記述したこの書物で改めてよく知ることができた。だが、記憶力が衰えて読む途中から忘却の闇に消えていくので、自分の生きた時代のことを書きとどめておこうと思う。しかし、この大部の書物の全 19 章の書き抜きをつくる力はない。20 世紀の後半が社会と文化のあり方を革命的に転換した、とする第 10 章と第 11 章だけを対象としよう。

わたしの生きた時代に、人間の社会に「革命」があったという認識は重要だと思う。そういうことばで捉えて初めて、若い世代との隔たりを感じ、現在の社会の潮流からおいて行かれているという自覚を明瞭に理解することができる。しかし、弱い力なりに培ってきた現在のわたしの思想を変えることはできないし、へたに変えるのはよくないだろう、と思う。不十分だけれども現在のわたしの視座から世界を見て考え

ることが最善の対処法だろう。この抜き書きづくりは、その視座をしっかりしたものにするのに役立つはずだ。

第 10 章　社会革命　1945－90 年

わたしの生まれた年から始まるこの年代を、ボブズポームは「黄金時代」と呼ぶ。わたしは黄金時代を生きて、革命を経験したのだ！

Ｉ．

- 人類史上最大かつもっとも劇的で、もっとも速く、そして普遍的だった社会変容…。この変容の新規さは、その異常なまでのスピードと普遍性にある。
- 量的な意味での物質的成長が生活の質の劇的向上へと変わった…。それに気づくのに時間がかかり、その性質を見極めるのにはさらに長い時間を要した。

  世界中のほとんどの地域では、この変化は突然に起き、地殻変動をもたらすものだった。

  こうした転換について、直接それを生き抜いた人々は、多くの点で理解が不十分だった。個々人の生活における変化として経験されたからだ。どれほど変わったか認識できるのは、それを外部からみていて、変化が起きている現場に時間をおいてからもう一度来るような場合。

① 20 世紀後半のもっとも劇的かつ広範囲に及んだ社会的変化は、農民層の消滅である。

日本では、農民は 1947 年から 1985 年にかけて 52.4%から

9%に減った。

農業革命：機械化などによる農業生産性の向上。

ii　20 世紀後半、世界はかつてないほど都市化された。

1980 年代半ばには、人口の 42%がすでに都市に住んでいた。

Ⅱ.

②　中・高等教育を要する職業が増えたこと。

とくに目覚ましかったのは大学教育。

大学生の増加は突然に起きた。近代経済には、それまでよりもずっと多くの行政官・教師・技術の専門家が必要だった。若者が知っていたのは、新しい時代だけだった。学生より年上の世代の人々は、苦労と職の無い時代に慣れているか、少なくともそういう時代を覚えていた。

Ⅲ.

③　1950 年代から「ポスト工業化社会」について数多くの議論があったし、非常に革命的な形で生産技術は変わっていた。

ii　労働者階級を基盤とする政党や政治運動が 1970 年を境にして危機的状況に陥った。

しかし、黄金時代が終わるころには、世界人口に工業労働者が占める割合が史上最高になることは確実だった。

労働者階級が絶滅するように見えたのは、労働者階級の内部での変化と生産過程における変化のせい。

iii　生産の場所が、古い工業国から新しい工業国へ移った。
労働者を外国で雇うようになった。

iv　新しい技術・自動化された生産工程。
労働人口に製造業が占める割合は 1980 年代後半に： アメリカで 20%以下、西側先進諸国で 1/4。
労働者の生活の仕方が、分散し、階級的に分離されたものではなくなっていった。労働者階級内部のさまざまな区分のあいだに亀裂が広がった。
→ 労働者階級としての意識の拡散的な変化。
「立派な」労働者は、政治的右派の潜在的支持者になった。
→ 若者独自の新しい文化。

v　人の移動。とくに、西ヨーロッパへの移民の流入。
労働階級のエスニシティ・人種が多様化し、階級内部で対立が生じるようになった。

Ⅳ.

④　女性が社会で担う役割が驚くほど増えた。とりわけ、既婚女性において画期的だった。
第三次産業が盛んになったことは、20 世紀の動きのなかでひと際目立つものの一つだった。

ii　高等教育を受ける女性の数も驚くほど増加した。

iii　先進国ではフェミニズムが見事な復活を遂げた。

→ 社会的・個人的行動の慣習の劇的な転換。

第 11 章　文化革命

Ⅰ.

- **社会の基本をなし、かつ長期にわたって維持されてきた家族と世帯のあり方が、20 世紀後半になると、急速に変わり始めた。**

①　結婚という男女間の形式、妻に対する夫の優位、こどもに対する親の優位、年少者に対する年長者の優位、複数の構成員から家族構成が、急速に変わり始めた。異変が、欧米を先頭に、結婚生活で起き始めた。

単身世帯が多くの欧米諸国の大都市で全世帯のおよそ半分にのぼった。1960 年の段階で核家族が全世帯の半分以上だった国で、今では、核家族が少数派になった。アメリカでは、全黒人家庭の 58%で独身女性が大黒柱になっており、未婚の母親の基に生まれた子どもは 70%にのぼった。

ii　家族の危機は、性行動・パートナーとの関係性・生殖を左右する世間の基準がきわめて劇的に変わったことに関係していた。

iii　離婚・婚外子・産児制限などで、法や宗教、慣習的道徳や因習の拘束力がなくなっていった。

→ 近代化を遂げている地域全体でみられるようになった。

Ⅱ.

②　独特で影響力の強い若者文化の興隆、異なる世代間の

関係性の大きな変化。

若者がいまや独立した社会主体となった。

先進国の市場経済で支配的になった。技術の進歩が、若者に優位性を与えた。世代が負っている役割の逆転。

若者文化の目新しさは、その驚くほどの国際性。グローバルな若者文化。若者の市場。

若い世代が生きる社会は、親世代が生きてきた過去から切り離された。上の世代の経験や気持ちを理解する術を。若い世代は持ち合わせていなかった。

肉体労働をした世代と機械を使う世代とのあいだの亀裂。家族の絆がどれほど固くても、家族を結びつけている伝統というしがらみがどれほど強かろうと、人生に対する理解や経験・期待についての、上の世代と大きな隔たりがあるのはいたしかたないことだった。

Ⅲ.

③　若者の文化は、作法や習慣、余暇の過ごし方、商業美術におけるより広い意味での文化的な革命の基盤なった。

誰もが外部からは最小限の制約しか受けない状態で、「自分のことをする」ことになったのだ。

下層の文化が上層階級にはじめて影響するようになった。

ii　個人的な解放と社会の自由化とは同時に進んだ。

それまで禁じられたり逸脱とされたりしていた行為を実験的に行なうことが増え、頻度も高くなった。

同性愛を公然と実践するサブカルチャーが大っぴらに登場した。

iii　この転換の大きな意義は、こうした変化によって、長い歴史と伝統を持つ人間の序列化 ― 社会の習慣や禁止事項という形で表現され、認められ、象徴的に扱われてきた ― が陰に陽に拒否されたことだった。

iv　さらに重要なのは、個人の欲望という何の制約も受けない自治の名のもとに行なわれた点だ。

いまや、個人的欲望の追求を特徴とする数百万の人間によって世界は成り立っているということが暗黙の前提とされるようになった。

Ⅳ.

- 20 世紀後半の文化の革命的変化は、社会に対する個人の勝利として、いやむしろ、かつて人間を社会という織物に編みこんできた糸を切断したものとして、いちばんよく理解できるのではないか。なぜなら、その織物を成り立たせているのは、実際の人間関係とその組織のされ方だけではなく、人間関係に関する一般的なモデルや人々が互いに期待している行動パターンも含まれるからだ。

社会規範に欠けた社会しか知らない人とは互いに分

かり合えないがゆえに、深くさいなまれる不安が生じるのは珍しくない。

- 親族・共同体・隣人からなるネットワークの弱体化。変わりゆく世界で経済的に生き延びることを困難にした。M. サッチャー「社会などというものはない。個人が存在するだけだ」。
  伝統的な家族の絆が弛緩したことで物質的な面がうける影響は、いっそう深刻だった。なぜなら、家族とは、これまで一貫して家族を再生産する装置であったが、それだけではなく、社会的協同のための仕組みでもあったからだ。
- 経済以外の集団の絆や連帯は、土台からむしばまれつつあった。同時に、それに付随していた道徳的秩序も弱体化していた。
  習慣・制度にあった人間の社会生活を組み立てるちからはほとんど失われた。
  確実性や予測可能性は、もうすぐ失われようとしていた。

- 「ポストモダニズム」は、判断と価値という問題をすべて回避しようとした。いやむしろ、制限されない個人の自由という単一の基準に還元しようとした。
- ゲマインシャフトはゲゼルシャフトへ、つまり、共同

体ではなく、匿名性をおびた社会で個人が結ばれるようになった。

- 古い共同体・家族間と新しい社会との共存が、20 世紀半ばまでの近代工業社会にとってとれほど決定的に重要であったか、ほとんど気づかれていない。古い共同体と家族が驚くほどの速さで解体されていった影響がどれほど劇的になりうるか、じゅうぶん理解されていなかった。
- 社会から表向き排除されているに等しく、労働市場での実質的な構成員足りえない市民の一群「アンダークラス」の登場。
- 古い社会組織と価値体系が擦り切れ、音を立てて壊れることからくる政治的な脅威。

- 勝ち誇っていることが多かった資本主義経済にとっても脅威となっていた。

  資本主義体制は市場の活動の上に築かれたものであったにせよ、個人の利益の追求とは本質的に関連のない多くの性質に依拠してきたからである。
- 資本主義は、それが機能している環境や過去から受け継いだ環境を当然視してきた。それがどれほど必要不可欠なのかに気づくのは、空気が薄くなった時だけ。利益の最大化と蓄積は資本主義の成功にとって必要ではあるが、それだけでは不十分だ。受け継がれてき

た資本主義の歴史的遺産を侵食するようになり、その遺産なしで資本主義を機能させることが困難であることを示したのが、20 世紀最後の約三十年に起きた文化的革命だった。

＊

二つの章の書き抜きだけを記したら、唐突な終わり方になった。それとは別に、ホブズボームが記述した時代から 30 年以上経った現在から見ると、この認識だけで十分だろうかという疑問が起きる。1990 年から、冷戦構造が崩壊して世界政治の体制が転換し、経済の金融資本化の目もくらむ深化が進み、すべての面でことばの真の意味でのグローバル化が進んだことで、人間の社会と文化に第二次の革命が起きつつあるのではないか。転換期の歴史の渦中にいる人間にはいつもそう見えるのかもしれないが、人間世界全体に新しい相転移が進行中なのではないか。現代をとらえるにはもう一つ書物が書かれなければならないのではないか、とわたしには思える。

今、ロシアのウクライナ侵攻を日々テレビの映像で見せられながら、わたしは、われわれの愚かさを痛感し、目の前に起きている現実を受けとめるのに苦しんでいる。世界の社会と文化が革命的に変化したことを知らず、プーチンは時代遅れの戦争をして人の命を奪うという最悪のことを行ない、自分に大切なロシアの衰弱をもたらしつつある……。報道から何を学べばよいのか……。

2022 年 4 月穀雨　　海蝶　谷川修